

かわつる  
グリーンタウン  
松ヶ丘  
(埼玉・鶴ヶ島市)



子育てサロン「虹の会」を主宰する柴田尚子さん。「気心の知れた人と、子どもと一緒にじっくり育てていきたい」

# 子育てを孤独にしない 人と人をつなげる取り組み

引越してきたばかりでなじみのないまちに子どもと2人きり。「近所に友達ができればいいな」「じっくり付き合える友達が欲しい」——。内心はそんなふうにも思っているが、第一歩はなかなか踏み出せないもの。かわつるグリーンタウン松ヶ丘ではコミュニティの活性化に向けて、団地の集会所などを活用した、住民主体による様々な取り組みが始まっている。

2年近く前に苦悩していた自分が嘘のようだ。当時はこの団地に引越してきたばかりで、周囲に見知った顔は全くなかった。強い孤独感に苛まれて、泣いている娘を連れ、近所をあてもなく歩き回ったこともあった。いまは違う。気の合う仲間も見つかり、そんなママ友と他愛のないおしゃべりに花を咲かす時間がとても楽しい。育児という共通の楽しみと苦勞を共感できる間柄だから、多少の悩みはお互いに話すことで、ほとんどは解消できる。「あのイベントに参加して本当に良かった」——。埼玉県鶴ヶ島

市にあるUR賃貸住宅「かわつるグリーンタウン松ヶ丘」に住む柴田尚子さんはそう実感している。あのイベントというものは、昨年1月、地元鶴ヶ島市の社会福祉協議会(社協)がUR都市機構とともに団地の集会所で、4回にわたり開催した「パパママ爺婆養成講座」のことだ。**原風景をつくってあげたい**

コミュニティへの入り口になった。講座に参加した柴田さんは、講師の話に深く感銘を受けた。「子どもにとって原風景をつくるのが大事」「帰れる場所を持っていることが大きな支えになる」——。「話を聞いて、自分の子どもにも、そうした故郷としての記憶に残るような原風景を持たせたい」と、柴田さんは振り返る。折しも、その2カ月後に東日本大震災が起きる。「子どもにとつての居場所、安心できる場所が欲しいと切実に願うようになりまして」(柴田さん)。



## 子育てに配慮した親切リフォーム

一部の住戸を対象に、子育てに便利な工夫を随所に凝らしたリフォームを実施している。かわつるグリーンタウン松ヶ丘の、便利で安心な設備を紹介する。



半透明で光を取り込める間仕切り。子どもの気配を感じられる



玄関収納にはベビーカーを畳んで入れられる(上)。住棟のエントランスに設けられた専用のベビーカー置き場(下)はシルバーカーにも対応可



取り外し可能な物干し用金物(左)や、差し込み口に感電防止を目的とした遮断扉を付けたコンセント(右)も、うれしいアイデア



★



鶴ヶ島市社会福祉協議会主任の牧野郁子さん。子育てサロン「虹の会」やコミュニティカフェ「ひだまり」の立ち上げを裏で支えてきた。「社協の役割は、住民の皆さんのお手伝いをする事。子育て支援も、少子高齢化だけではなく、地域課題解決の取り組みの一つとして行っています」



かわつるグリーンタウン松ヶ丘では、自転車などの立ち入りを禁じて、安心して子どもを遊ばせておくことができる乳幼児プレイエリアを団地内広場に併設している

★



★



★

集会所内部は、親子が使いやすいように改修された。オムツ交換用シートは男女両方のトイレに設置(上)。子ども用に低く置かれた洗面所のシンク(下)



★



子育てサロン「虹の会」は毎週月曜、団地の集会所を使って開かれる(左は集会所のエントランス)



昨年1月、集会所を使って開催された「パパママ爺婆養成講座」

## 商店街の空き店舗を活用したコミュニティカフェ「ひだまり」

「かわつるグリーンタウン松ヶ丘」に近い商店街の中に、コミュニティカフェ「ひだまり」はある。川越市の主任児童委員の経歴を持つ上養礼子さんらの市民グループが、「地域の人たちが世代を超えて交流できる場をつくりたい」と考え、昨年10月、空き店舗を活用してオープンした。背景には、子育てに孤立感を持つ母親が増えていることへの危機感があった。



「ひだまり」を支える市民スタッフ。左から3人目が上養礼子さん

「ひだまり」のスペースの半分はカフェで、買い物帰りの高齢者などにランチや飲み物などを提供する。残りの半分はマット敷きで、母親たちが子どもとつろぐことのできるキッズコーナー。互いは家具で緩やかに仕切れられ、半分閉じて半分開いた、いわば付かず離れずの造りとなっている。毎週金曜午前には「みんなで遊ぼう」との呼び掛けで主に子育て世帯が集まる。「食」をテーマにした連続講座も開かれ、幅広い世代が集う。開設以来この4月末までの約半年間で延べ3100人余が利用した。あるとき、店内で子どもが大声で泣いていると、居合わせた高齢者が「子どもの泣き声っていいね」と、うるさがるどころか喜んでくれたという。「お母さんはその言葉を聞いて、

「怒らずに、そんなことをしてくれる人もいるんだ」と、ほっとした様子でした(上養さん)。これも、子育て世帯と高齢者の交流の小さな成果と言えるかもしれない。



「ひだまり」には、親子連れや若者、高齢者など、幅広い層の人が訪れる

団地近くの商店街の空き店舗を活用したコミュニティカフェ「ひだまり」のスペースの半分はキッズコーナーになっている

★

一方、講座を共催した社協にも一つの思惑があった。「子育て真っ最中の母親がお互いにつながりを持てる場や、孤独になりがちな親子が、子育ての経験を持つ高齢者などと自然に交流できるような場をつくれなにか」と考えていたのである。「講座開催は、そうした場づくりを担ってくれるリーダーを探す目的もありました」。鶴ヶ島市社会福祉協議会主任の牧野郁子さんはそう打ち明ける。

柴田さんはその意図を素直に受け止めた。「同じ思いを持つ人と一緒に、そういう場をつくっていきたい」。柴田さんは思いを行動に移す。

場所は、団地の集会所が用意された。子育て支援に積極的に取り組むUR都市機構は、この

活動に団地の集会所を提供。さらに、親子が使いやすいよう、集会所のトイレにオムツ交換用シートを設置したり、洗面所のシンクの高さを子どもにも合わせると、内部を大幅にリフォームした。

こうして、子育てサロン「虹の会」は昨年10月、誕生した。講座開催から約9カ月後のことだ。

**じっくり付き合える良さ**

「虹の会」の活動は毎週月曜午前11時から始まる。時に絵本、時にちぎり絵、時にわらべ歌、と毎回趣向を変えて、午後3時くらいまで時間を過ごす。企画運営には参加者全員が携わる。「お客さん」はいない。参加者の誰もが主催者だ。自ら企画運営する活動を通じ、お互いの関係はおのずと深まる。

「表面的な関係でなく、じっくり付き合える良さがあります」と、柴田さんは活動の意義をこう語る。本音で付き合うことができ、ば、お互いの悩みも打ち明けやすい。活動を始めた当初に思い描いていた理想の間柄だ。

6月の第二月曜は、週末に控えた父の日に向けて、画用紙と折り紙で父親の顔づくりに挑戦。切ったり貼ったり、集まったみんなで手作業を楽しそうに続けていく。活動を通じて願うのは、子どもにとっての原風景づくりだ。

**交流のための様々な取り組み**

月曜の定例活動とは別に、毎月1〜2回、土曜日に小さなイベントも開く。多くの人の目に付くように、集会所の屋外活動が主だ。イベント開催は、手作りのチラシを団地内の掲示板に貼って知らせる。「同じような悩みを持つお母さんたちに、ぜひどし参加してほしいと思っています」と柴田さん。

かわつるグリーンタウン松ヶ丘にはこうした子育てサロンのほかに、地域の人同士がつながるための様々な仕掛けづくりが展開されている(12ページの記事参照)。ここで育つ子どもたちの原風景の中には、地域の人たちが築き上げる多様なコミュニティの姿が刻み込まれていくことだろう。